

## 「スルメイカ」資源が大きい「秋生まれ群」

### 漁業者に情報提供

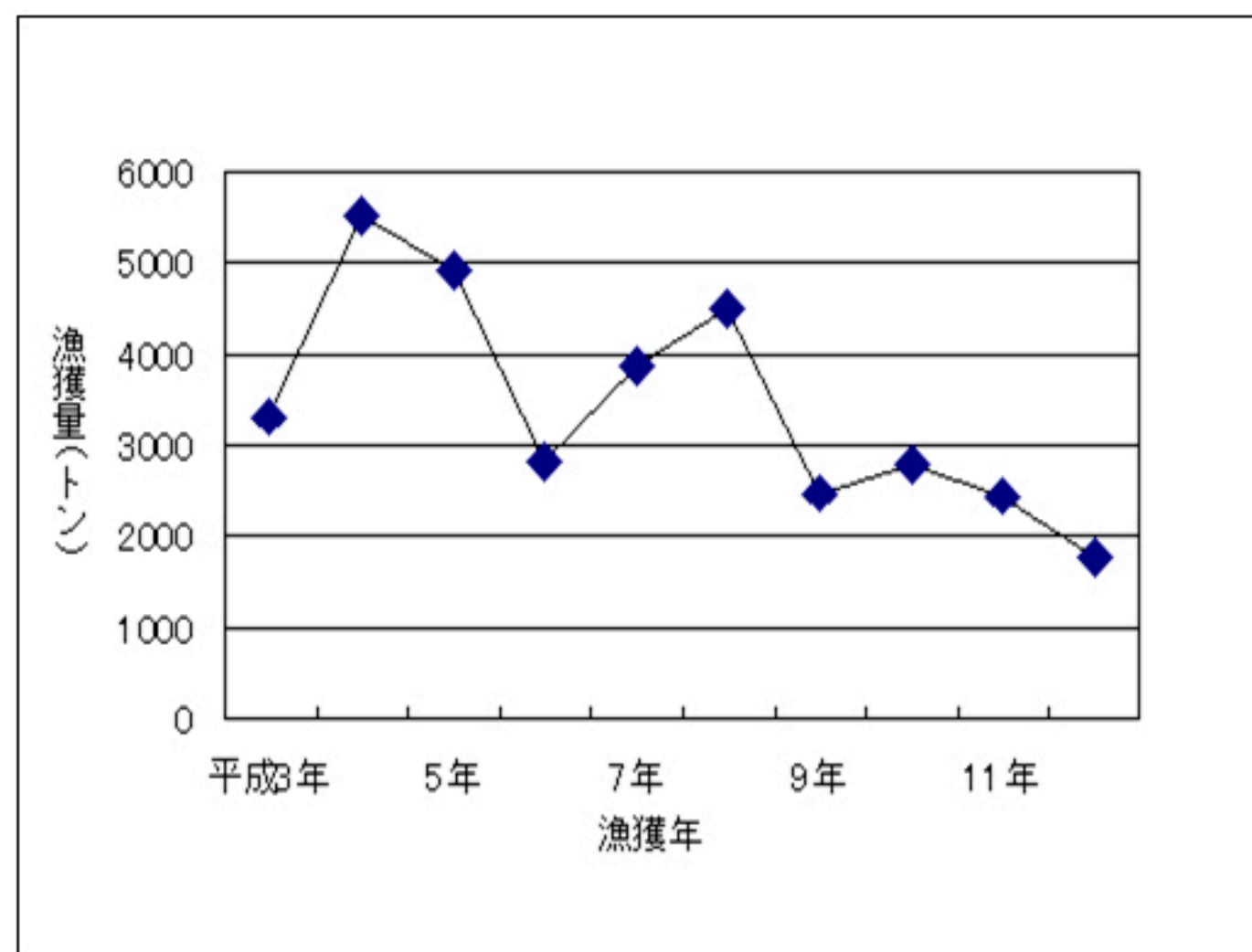
日本近海のスルメイカは、生まれた時期によって、夏生まれ群、秋生まれ群そして冬生まれ群に分けられる。いずれの群も日本海西部海域から東シナ海にかけて生まれ、成長に伴い日本海全域を南北に回遊している。寿命は1年である。

秋生まれ群がもっとも資源が大きく、富山県を含む日本各地のいか釣り漁船は、この群を追って日本海を九州沖合から北海道沖合まで大移動している。その他の群は、秋生まれ群に比べて資源は小さいが、各地沿岸漁業の重要な水産物となっている。

富山県に水揚げされたスルメイカの最近10年間の漁獲量は、1,700トンから5,500トンである。県沿岸では、冬から春にかけて、主に定置網によって漁獲され、この時期の重要な漁獲対象種となっている。

漁獲されたスルメイカの大きさや成熟度を見ると、1、2月に漁獲されるものは、大型で成熟が進んでいる一方、3月以降漁獲されるものは、小型で未熟であることから、前者は冬生まれ群、後者は夏生まれ群と考えられている。

県水産試験場では、漁業調査船立山丸(160トン)によって、山陰沖や大和堆などで漁場調査を行い、沖合漁場における漁獲量や水温などの情報を、富山県からの出漁漁業者に提供している。また、冷水が富山湾側へ接近すると湾内への来遊量が多くなる傾向があることから、この関係を利用して、冬から春にかけてのスルメイカの富山湾への来遊量を予測し、漁業者に情報提供を行っている。調査担当者として、これらの情報が漁業経営に立つことを願っている。(若林信一)



富山県におけるスルメイカ捕獲量  
(富山統計情報事務所:富山県漁業の動きより)